



中国での「人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト」を担当している鈴木さん(中央)。日本のトキ生息地である佐渡市で保全状況を環境省担当者と視察

自然環境保全を通じた 社会貢献をしたい

現在、JICA地球環境部で、自然環境保全に関するプロジェクトを担当する鈴木和信さん。人間の安全保障に重点を置いたJICAならではの支援で、貧困に苦しむ人々に着眼した自然環境保全を目指している。

困

っている人たちの役に立ちたいという思いから、高校時代は医療の道に進みたいと考えていました。しかし医学部受験に失敗。大学では生物工学の分野で、微生物を利用した環境問題解決のための研究を行いました。今思えば、このころから環境への関心が徐々に高まったように思います。そして就職を考えた時、やはり世の中の役に立ちたいという思いが強く、これまでの研究の経験を生かす道はないかと考えていたところJICAの存在を知ったのです。

JICAでの最初の配属先は九州国際センターで、環境問題を克服した歴史、経験がある九州ならではの環境関連の研修コースを多く担当。その時に出会ったのが財団法人北九州国際技術協力協会の方々でした。日本の高度成長期を支え、北九州市の公害を克服した技術者の方々が、「これまで日本にお世話になった分、今度は自分たちが社会に恩返ししたい」と定年退職後に国際協力に従事されていました。私の祖父と同じくらいの年齢の方々が英語で技術指導をされていて、とても刺激的で感動すら覚えました。新人のころにこのような方々と出会えたことは今でも私の財産になっています。

その後も環境問題を扱う森林・自然環境協力部(当時)に配属され、特に自然環境保全の業務にかかわってきました。そしてこの分野の協力指針を作成する業務を行っている



JICA地球環境部
森林・自然環境グループ
森林・自然環境保全第一課

鈴木和信
SUZUKI Kazunobu

大学卒業後、1996年にJICAに就職。九州国際センター、社会環境調査部、森林・自然環境協力部(いずれも当時)、海外研修制度を利用した国際自然保護連合でのインテリゲンシップ、ベトナム事務所を経て、2008年11月から現職。

たころ、JICA内では情報共有の体制づくりやグローバルで学際的な人材ネットワークの構築に向けた議論が盛んに行われていました。その時から、自分自身も「世界」に飛び出したいと考えるようになりました。そして、できれば世界をリードしている機関で働きたいと思い、海外研修制度を利用して、国際自然保護連合へ。世界自然遺産登録の技術的な評価や絶滅の恐れのある生物種のリスト作成などを行う組織でインターンシップを経験する機会に恵まれました。本部のあるスイスで一年間働きましたが、日本人は私一人。日本政府、日本企業、日本のNGOなどとの連携強化のため、双方の調整を図るのが私の役割でした。しかし、専門知識と英語力のない自分は周りについていけず、疎外感や孤独感を嫌というほど味わい、くじけそうになることもしばしばありました。それでもここで負けてはお世話になった方々に失礼だと自分を鼓舞し、最後まで業務を遂行することができました。

いった外から入ってくるモノや情報を選択するメカニズムが機能しているはずですが、社会的弱者と呼ばれる貧困層の多い地域では、外部から流入してくるモノや産業構造・市場経済化などの変化の影響をまともに受けているのが実情です。その結果、地域社会そのものの諸機能が崩壊し、地域の自然環境の破壊も進んでいます。貧困がさらに貧困化するという悪循環も見られます。このような弱い立場に置かれた住民を支援が届く。最後の人々にせず、最初の人々となるよう、住民の目線に立った開発が必要であると考えています。

国際自然保護連合では、「世界」が自然環境保全にどのように取り組んでいるかを目の当たりにすることができました。今後はこの経験を生かし、人間の安全保障を重視した、JICAの視点で自然環境保全の業務に取り組んでいきたいと思っています。いつかは、九州で出会った方々のように、国際社会や日本社会に恩返しできればと思っています。



インドネシアでの「泥炭・森林における火災と炭素管理プロジェクト」の現地調査を担当し、協力内容を協議する鈴木さん(奥左から二人目)